

子育て期にある母親の「母性愛」信奉傾向における主観的な意識

江上 園子*

Mothers' subjective consciousness of adherence to "maternal love"

EGAMI Sonoko

abstract

This study examined how 28 women raising young children talk about and make sense of their adherence to "maternal love" and themselves. This study is a qualitative investigation of adherence to "maternal love" that was treated as a quantitative concept, for example, high, middle and low. The results showed six types of adherence to "maternal love" (Women who accept adherence to "maternal love, accept it but are unable to do so, accept it to themselves, accept part of it and refuse the other part, refuse but practice it, and refuse it) were identified. Four types of them (Women who accept it but are unable to do so, accept it to themselves, accept part of it and refuse the other part, and refuse but practice it) were seemed to be middle group of adherence to "maternal love", but their narratives were very different. So, it is necessary to investigate not only quantitatively but also qualitatively of adherence to "maternal love". Then, it must have a qualitative research including mothers' life-event and life perspectives.

Key words : Adherence to "maternal love" 「母性愛」信奉傾向、Subjective consciousness 主観的意識、Meaning-making 意味づけ、Qualitative investigation 質的研究、Narrative 語り

問題と目的

従来、伝統的育児観や母性観に基づいた子育てが好ましいとされてきたわが国において、近年、「母性愛」という概念や母性愛神話などの社会文化的通念の危険性が指摘されている(大日向, 1988, 2000)。しかしそれらについての実証的な研究がなされる中で、そのような信念が母親の精神的健康や子育てに与える正負両面の影響も明らかになりつつある(塩崎, 2006; 江上, 2005, 2007)。例えば江上(2005, 2007)は、「母性愛」信奉傾向を「社会文化的通念として存在する伝統的性役割観に基づいた母親役割を信じそれによって育児を実践する傾向」と操作的に定義し、「母性愛」信奉傾向尺度を作成し、それと母親をとりまく要因とが交絡することで子どもに対する感情制御・表出に正負双方向から影響することを質問紙調査によって検証してきた。

しかしながら、それらのような数量的解析のみからでは、「母性愛」という概念や伝統的な育児観が母親個人の考え方や、実際に母親個人の子どもの向き合い方や接し方と関係しているのかということが見えない。これに関して、やまだ(1995)が指摘しているように、昨今、定量的データのみで発達という現象にアプローチすることへの限界と反省がなされるという流れが定着しつつある。Birns & Hay (1988)も、母親を感情、思考、行動、興味、関係、歴史、将来などを含めた統合的な存在として捉えることで「母性」や「母性愛」も究明できるとしても、そのためには面接・インタビューという方法がより重要になってくるだろうと述べている。実際

キーワード：「母性愛」信奉傾向、主観的意識、意味づけ、質的研究、語り

*平成14年度生 人間発達科学専攻(北海道教育大学)

に、育児経験は主観的な経験であり、個人の内的経験である。客観的事実がどうであれ、子どもを育てる体験は一人ひとり持つ意味が異なる（川村, 2007）。Beck-Gernsheim (1995) も、母親になるという経験が自明で等しいものではなく、個人の生き方の中で選択され、営まれていくものだと位置づけられると述べている。またこれこそが、まさにその母親一人一人をとりまく世界に対する知覚レンズ（氏家, 1996）のあらわれであると考えられ、子育てにおいて、この知覚レンズの影響は大きいものとも言える（氏家・高濱, 1994）。母親になる経験をどう感じてどのように意味づけるかということについては、その個人の生き方や生活の状況によって多分に異なる（Oberman & Josselson, 1996）。徳田（2004）でも、第一子の年齢や生活スタイルが同様な母親のサンプルの中でも、多様な子育ての意味づけのパターンが見られた。

これと関連して、例えば江上（2005, 2007）における同じ「母性愛」信奉傾向中群に属するような母親たちでも、その個人によって「母性愛」信奉傾向の主観的な受け止め方と、その考え方をどのように子育てで実現していくのかという様相が異なる可能性は否定できない。したがって、本研究では子育て期の母親に対して面接調査を行い、母親が語る「母性愛」信奉傾向について質的な検討を行うことで、母親が有する「母性愛」信奉傾向における主観的な意識を探ることとする。具体的には、江上（2005）で作成した「母性愛」信奉傾向尺度に回答させ、それに対する意見や印象を語らせることから、母親の「母性愛」信奉傾向のあり方を明らかにしたい。そこで得られた語りには、「母性愛」信奉傾向尺度の高低という量的な違いだけではなく、何らかの質的な異なるパターンが見られるのか、見られたとしたらどのようなものか、尺度得点から想定される語りがあらわれるのか、そうでないならなぜそのような語りが見られたのか、ということを考察していく。

さらに、母親の学歴との関連も検討する。永久・柏木（2000, 2002, 2005）の一連の研究によると、高学歴であることが女性の家庭役割以外の領域への関心や能力の自負などを左右する重要な要素であると結論されている。ゆえに、本研究での協力者である母親ひとりひとりが「母性愛」信奉傾向を肯定、否定するかという点でも、学歴が大きな要因を占める可能性も考えられる。そのため、語りから母親をグループ化して特徴を述べた後、事例によって、就業形態及び学歴という母親の属性も考慮に入れつつ分析する。

方 法

調査対象者 幼児を持つ女性28名。母親の平均年齢は33.3歳（*SD*5.1, 範囲23-44）。常勤職が3名、パートタイムが3名、無職が21名、大学院生が1名であった。高卒が10名、専門学校卒が4名、短大卒が7名、大卒が5名、大学院卒が2名であった。子どもの数は、平均1.7人（範囲1-3人）であった。すべての協力者の基本的な情報は、Table1に示す。

手続き 福岡県内の幼稚園1園と保育園2園に、江上（2005）に関わるアンケート調査を行った際、その紙面の最後にインタビュー調査への協力を依頼し、承諾してくれる場合に連絡先を書いて貰うよう頼んだ。連絡先が記入してあった場合には直接連絡し、承諾が得られれば協力者の自宅、大学の研究室、喫茶店などでインタビュー調査を行った。また、この調査への協力者の紹介を通し、神奈川県、東京都、埼玉県、京都府に住む母親にも依頼し、合計で28名の母親からの協力を得た。面接に際しては、はじめに協力者と十分なラポールをとった上で、書面と口頭による説明で守秘義務を明確にし、ありのままを語ってくれるように依頼した。同意を得た後、調査を開始した。インタビュー調査は半構造化面接であり、質問項目をあらかじめ設定し、チェックリストを持った上で臨んだ。同時に、面接中は適宜、協力者にとってできるだけ自然な会話に近い様子で進めていけるように努めた。協力者の同意の上、面接中の発話はすべて音声記録に残した。面接に要した時間は、協力者一人あたり約10分～約35分であった。

調査項目 現在の家族構成や就業形態、学歴などのフェイスシート項目と「母性愛」信奉傾向尺度（範囲12-60点）を含むアンケートに回答させた後、「母性愛」信奉傾向について、①「このような考え方についてどのように思われますか」、②「そのように意識されるきっかけなどはありましたか」というインタビューによる設問を行う。設問①では、「母性愛」信奉傾向に対する簡単な印象や意見を聴き、②では、具体的な事態を想像させることで、個人的な語りや豊富な内容を引き出すことにした。

Table 1 協力者全員の基本的な情報と得られた語りのタイプ・尺度得点

ID	年齢	家族構成	就業形態	学歴	タイプ	尺度得点
01	44	夫、長女（6歳）	専業主婦	短大	A（肯定型）	41
02	32	夫、長女（3歳）、長男（1歳）	専業主婦	高校	A（肯定型）	52
03	34	夫、長女（9歳）、長男（7歳）、次男（2歳）	専業主婦	専門学校	E（否定実行型）	41
04	34	夫、長男（3歳）、次男（1歳）	専業主婦	高校	A（肯定型）	52
05	38	夫、長女（5歳）	専業主婦	短大	C（自分肯定型）	40
06	25	夫、長男（2歳）	専業主婦	大学院	D（部分否定型）	29
07	34	夫、長女（4歳）	専業主婦	短大	F（否定型）	25
08	36	夫、長女（2歳）	専業主婦	大学	A（肯定型）	51
09	35	夫、長男（5歳）、長女（3歳）、次女（1歳）	常勤職	短大	B（肯定不可能型）	39
10	29	夫、長男（2歳）	専業主婦	高校	C（自分肯定型）	40
11	28	夫、長男（2歳）	専業主婦	専門学校	D（部分否定型）	38
12	35	夫、長男（15歳）、次男（11歳）、長女（3歳）	専業主婦	高校	A（肯定型）	51
13	34	夫、長女（7歳）、長男（5歳）	常勤職	短大	C（自分肯定型）	44
14	43	夫、長男（15歳）、次男（6歳）	常勤職	専門学校	F（否定型）	37
15	39	夫、長男（9歳）、次男（4歳）	専業主婦	大学	B（肯定不可能型）	34
16	28	夫、長女（2歳）	専業主婦	専門学校	A（肯定型）	52
17	33	夫、長男（5歳）、長女（1歳）	専業主婦	大学	C（自分肯定型）	37
18	23	夫、長男（2歳）	専業主婦	高校	E（否定実行型）	34
19	32	夫、長女（5歳）、次女（3歳）	パート	短大	F（否定型）	27
20	32	夫、長男（5歳）	専業主婦	高校	D（部分否定型）	41
21	37	夫、長男（6歳）、長女（3歳）	大学院生	大学院	F（否定型）	18
22	31	夫、長女（3歳）、長男（1歳）	専業主婦	高校	A（肯定型）	46
23	28	夫、長女（2歳）、次女（0歳）	専業主婦	大学	D（部分否定型）	43
24	35	夫、長女（7歳）、次女（5歳）、長男（3歳）	専業主婦	短大	B（肯定不可能型）	32
25	31	夫、長男（3歳）	専業主婦	高校	C（自分肯定型）	49
26	39	夫、長女（5歳）	パート	高校	C（自分肯定型）	30
27	25	夫、長女（3歳）、長男（1歳）	パート	大学	F（否定型）	36
28	37	夫、長男（5歳）、次男（1歳）	専業主婦	高校	E（否定実行型）	36

結果

本研究では、「母性愛」信奉傾向に関する二つの設問に対する語りから、母親のグループ化を試みた。「母性愛」信奉傾向が高低のみで測られるのか、そうでないグループが出現するのか、各グループの「母性愛」信奉傾向尺度得点はどのようなものとなっているか、ということを経験形態や学歴とも絡めながら、各グループにおける事例も取り上げて詳細に検討していく。

質問①と②に対する回答について、「母性愛」信奉傾向を受容しているのか、拒否しているのか、また受容・拒否という二分法的な見方ではなく、どのように受容しているのか、そこに葛藤や矛盾はないのか、なぜ拒否しているのか、といった面から分析を試みる。録音した発話をすべて逐語録に起こした後、「母性愛」信奉傾向に関する回答を類型化することとした。分類の際は、まず、その個人の語りの内容をエピソード単位で区切った。エピソードの定義は、一文の長短や文の数とは無関係に、「同じ内容について言及している話」とした。なお、同じ内容の流れからまた違った事例の話をした際、具体例の説明付加等は別のエピソードとして数えた。次に、それぞれのエピソードを「母性愛」信奉傾向について肯定的か否定的か判別不能かということで三種類に分けた。個人の語りにおいて一貫して肯定的エピソードを語ったものを「肯定群」、同様に一貫して否定的な語りをしたものを「否定群」として決定した。一方、協力者の中には、「母性愛」信奉傾向を最初は矛盾無く肯定（または

否定)しながらも、語りを進めていくうちに異なる言及を行うものもいた。その母親たちを「境界群」と仮に分類しておき、その後、発言内容に従ってさらに分析した結果、「肯定不可能群」・「自分肯定群」・「部分否定群」・「否定実行群」の4群が見出された。なお、心理学専攻の大学院生1名に、ランダムに選択した10名分のすべてのエピソードを含んだプロトコルと6つのグループ名およびその定義を説明し分類を依頼したところ、10名すべての分類が筆者と一致した。グループ名とその定義、人数、語りの例はTable 2の通りである。なお、Table 1では、すべての協力者のIDとプロフィールのほか、語りのタイプと「母性愛」信奉傾向の尺度得点を示している。Table 3は、Table 1で得られたグループ別の就業形態、Table 4では各グループにおける学歴をまとめたものである。

以下、Table 1およびTable 2、Table 3、Table 4に示した各グループにおける「母性愛」信奉傾向に対する語りの特徴について述べていく。また、それぞれのグループにおいて、そのグループの特徴をもっとも明確にかつ端的にあらわす語りをした母親を1名ずつ選び、典型例として語りの内容を紹介する。IDは協力者番号、()内は筆者による内容の補足である。なお、「 」内は協力者の語りの部分である。

Table 2 「母性愛」信奉傾向に関する質問の回答から得られたタイプと尺度得点 (SD)

グループ	定義	人数	語りの例 (一部)	尺度得点
A. 肯定型	「母性愛」信奉傾向を矛盾・葛藤なく肯定するような語り。	7	絶対もう、ある時期があると思うんですけど子どもが小さいうちは母親が絶対必要というか、子どもの方が母親をこう、求めてくるんですよ。	49.3 (4.23)
B. 肯定不可能型	「母性愛」信奉傾向を肯定しているながらも、実際のところ、自分には不可能であるという語り。	3	育児に専念、頭ではですね、それが大事ななって思うんですけど、実際自分にはちょっと無理かなっていう部分があるんで。	35 (3.61)
C. 自分肯定型	自分は「母性愛」信奉傾向を受容しているが、すべての女性がそうではないという語り。	6	子どものためならもう、“無償の愛”じゃないけれども、自分は死んでも守りたいと思うけど、それは皆が皆そうじゃないと思う。	40 (6.42)
D. 部分否定型	「母性愛」信奉傾向をある部分では肯定し、ある部分では否定するという語り。	4	確かに母親を必要としてて、うちの子もそうだけど、専念するのが第一ってなるといまの女性の生き方をすごい制限しちゃうんじゃないかと思う。	37.8 (6.18)
E. 否定実行型	「母性愛」信奉傾向を否定しつつも、実際自分は実行している、してしまうという語り。	3	男性も女性も助け合うってやるっていうのがベースになってるんで。ただ現実、どちらかっていうと、私の場合は育児に専念している方なんです。	37 (3.61)
F. 否定型	「母性愛」信奉傾向を矛盾・葛藤なく否定するような語り。	5	女性にとって母親になることだけがこう、何か目的になるとか、子どもを産んで一人前っていうことにはすごく不自然さを感じる。	28.6 (7.96)
全体		28		39.1 (8.79)

Table 3 「母性愛」信奉傾向のタイプと母親の就業形態 (人数)

グループ	常勤職	パートタイム	専業主婦	大学院生
A. 肯定型	0	0	7	0
B. 肯定不可能型	1	0	2	0
C. 自分肯定型	1	1	4	0
D. 部分否定型	0	0	4	0
E. 否定実行型	0	0	3	0
F. 否定型	1	2	1	1

Table 4 「母性愛」信奉傾向のタイプと母親の学歴（人数）

グループ	高 校	専門学校	短 大	大 学	大学院
A. 肯定型	4	1	1	1	0
B. 肯定不可能型	0	0	2	1	0
C. 自分肯定型	3	0	2	1	0
D. 部分否定型	1	1	0	1	1
E. 否定実行型	2	1	0	0	0
F. 否定型	0	1	2	1	1

グループA：「肯定群」 <典型例> ID22：「子どもが小さいうちは家で一緒にいてやりたいと思いますし。今のところ、家計が苦しくなければ、専業主婦でいたいと思ってますね。」

このような典型例に見られるように、この群の母親は、女性は一般的に家庭で子どもを育てる方が自分にとっても子どもにとってもいいのではないか、という考え方を持っている。このグループの母親たちは、もちろん、言及の程度には言及量や強弱の質の違いは見られても、言及例にもあるように「自分が育児や家庭に専念したい（またはそうすべき）」だと思っただけではなく、「女性や母親が一般的にそうした方がいい」という考え方をしていることが特徴だと言えよう。また実際に、多少の得点差は見られても、「母性愛」信奉傾向の尺度得点もこの群の7名全員が全体の尺度得点の平均値よりも高く、群の平均値を比較しても、各群の中でもっとも高いものとなった。さらに、この群に属するすべての母親が専業主婦であった。このことから、「母性愛」信奉傾向を全面的に受容し、現実的に子育てに専念しているということがわかる。学歴に関しては、全員ではないが、高卒の協力者が多かった。これも、女性の高学歴化・有職化は家庭役割以外の領域を広げるといふ、永久・柏木（2000, 2002, 2005）と関連のある結果である。ただし、ID08は大卒で、妊娠したときも「産休が明けて一年経ったら子どもを保育所にあずけてすぐに仕事に戻るつもりだった。」と述べている。しかし「子どもと頬を合わせた瞬間にはあっとなって、なんて可愛いんだろう。」と感じたと述懐し、それからは「子どもに負担がかかると思って、仕事を辞めた。」と語った。また、現在は「子どもと一緒に過ごす時間が楽しい。」とも語っている。学歴が高くても、本人の意思とは別の何かのきっかけで、「母性愛」信奉傾向を受容するようになるということもあり得るのだろう。

以上のようなことから、ID08も含め、この群の母親は、「母性愛」信奉傾向を支持することにおいて現時点での矛盾や葛藤が無く、自ら「母性愛」信奉傾向を引き受けて現実的に子育ての場面でも実践しているということが、語りの特徴や得点の高さと直結していると思われる。

グループB：「肯定不可能群」 <典型例> ID24：「育児に専念、頭ではですね、それが大事かなって思う部分もあるんですけども、実際自分にはちょっと無理かな、っていう部分があるんで。まあ育児だけ、っていう風なのは、とても我慢できないかなっていう。」

この典型例に見られるように、この群は「母性愛」信奉傾向を肯定しつつも、「実際は出来ない」、「向いていない」と捉えている。つまり「母性愛」信奉傾向を肯定しているという点はA群（肯定群）と同様であるが、「頭では『母性愛』を信奉した方がいい」と思いつつも、「現実の自分には明らかに合致しない」という印象を持っている点が特徴的である。信念と実態とのギャップが大きい群であると言っていいたいだろう。具体的にID15とID24は、「母性愛」信奉傾向についてはポジティブな語りを一貫して行ったにもかかわらず、現在の自分の「思うように出来ていない」育児については一貫してネガティブな語りをしており、「自分は子育てに向いていない」と語った。これは溝田・住田・横山（2003）の研究でも主張されているように、母親の母性観における意識と行動が一致していれば安定的に育児を行うことが出来、一致していなければ不安な気持ちで育児を行うことになるということのあらわれではないかと考えられる。

もう一つの特徴としては、「母性愛」信奉傾向の尺度得点が相対的に他の群よりも低いということだろう。もちろん、F群（否定群）と比較すれば高いとも言えるが、語りの中では「母性愛」信奉傾向を肯定しているということから、むしろ尺度得点は高いと予想される。しかし、実際のところは低めであった。例えば、ID09は、「最初は自分でも仕事を再開するつもりはなかった」が、「保育園のすすめもあったし、ちょうど閉塞感や疎外感を

感じていたから、仕事をはじめた」と言う。その結果、「仕事をさせてもらっているから、休日はなるべく一緒にいてあげる、という風に（育児の）モチベーションを保っています。」と述べていた。ID09は、「母性愛」信奉傾向をもともと肯定しているが、実際に子育てに専念する生活を送ってみて、いろいろと悩むことが多かったという。そして、徐々に「母性愛」信奉傾向を引き受けたような生活は自分には出来ないと感じたという。その突破口として、仕事を始めてみて、楽になったと語っていた。これらの結果から、「母性愛」信奉傾向という信念を持っていても、実際の自分との乖離に直面している母親は、その乖離を感じていない母親と比べると、その信念に確信を持ってなくなり、信念が揺らいでくる可能性が示唆された。

グループC：「自分肯定群」 <典型例> ID17：「私は（子どもと一緒に）いてあげた方がいいと思ったから、この道を選んでますけど、うん。絶対ほんとにイライラするって人の気持ちもわからないでもないから。そういう人は働か？働いて保育所に子どもさんをあずけるっていう道もあっていいのかなとは思いますが。」

この典型例を参考にしながら、特徴を述べる。この群の母親は、自分自身は「母性愛」信奉傾向を受容しているが、「一般的にすべての女性がそうである必要はなく、そうでない道があってもいい」とする考え方を持っている。つまり、「母性愛」信奉傾向を受容している自分と他の女性とを区別して語っている点が特徴的であろう。この群に属するすべての母親が「（「母性愛」信奉傾向のように）決め付けるものじゃない」や、「断言はできないけど」などという言葉を用いていた。また、6名中の5名が、「子どもが生まれて、育てていくうちに自分が母親っていう部分が強くなってきて、こういう風に（「母性愛」信奉傾向のように）思ってきました。」や、「子どもが大きくなるにつれて、いろいろ子育てについて考えますよね。その中で、悩んだり苦しんだりする中でやっぱりこんな風に（「母性愛」信奉傾向のように）思うようになりました。」と語った。これらのことから、この群の母親はおそらく、女性一般を「母性愛」信奉傾向に当てはめるのは無理があると思いつつも、実際に自分が子どもを育てていく中で、徐々に「母性愛」信奉傾向に近い考え方を持つようになってきた母親たちであると思われる。これは、Terry (1991) や 柏木・若松 (1994) の研究で明らかになったように、親となることで柔軟性や自己抑制・自己の強さに関する成長が見られ、それがとくに母親において著しいという結果とも関連しており、その特徴がこの群ではあらわれているのではないかと考えられる。

そして、「母性愛」信奉傾向の尺度得点に関しても、「母性愛」信奉傾向を受容しているにもかかわらず、全体の平均値とほぼ変わらない得点となっている。個人の得点を見ても、もちろん個人差はあるが、おおむね平均値周辺か若干高い得点である。これも語りの特徴と同様に、「母性愛」信奉傾向を絶対的なものであるとは捉えていないが、自分は「母性愛」信奉傾向を受け入れているということを自覚している結果ではないだろうか。

グループD：「部分否定群」 <典型例> ID20：「やっぱり母親が一番あれなのかな、とも思うんだけど、でもその母親を支えてもらわないとダメな部分もあるな、みたいな。（中略）どっちかっていうと子ども優先ってなっちゃうけど、自分もやっぱり大事かなってのもあるかな。」

この典型例からも、この群では次のような特徴が考えられる。他のグループがそれぞれの特徴を有しながらも、「母性愛」信奉傾向という信念を「肯定」するか「否定」するかという点においてはわかりやすい語りであったことと比較し、「どちらとも言えない」、「子どもは大事だけど育児に専念する必要はないのでは」「あずけて仕事をしたいけれど子どもがかわいそう」というような揺れる表現が多かった点が大きな特徴であろう。中でも、ID06はその矛盾した気持ちに実際に「悩んでいる」という語りをしている。女性は母親になることで獲得と喪失という両側面を経験し (Nicolson, 2001)、育児においても自分と子どもというアンビヴァレントな感情を併せ持つ (Swigart, 1995)。先述したID06をはじめ、ID11もやはり「最初ですね、私は、母親になるっていうことに、なんだろう、なりきれない自分がいたんですよ。やっぱり今まで自分がやりたいときにいろんなことができるっていう自由があったけど、母親、っていうか子どもができちゃうと、それができなくなるでしょ？それがすごく嫌でたまらなかった、最初は、うん。」というように、自分の自由な時間が奪われるように感じるのが嫌だった一方で、「けど、やっぱりね、自分が見なきゃとかそういう、もう日々の積み重ねなんだろうけど、それによって芽生えてきたっていうのかな、なんか、愛情が。」というように、子どもが可愛いと実感するようになっている。それぞれの母親が、どのようにその「揺れ」に落としどころをつけるのか、あるいはそのままなのか、ということは本研究の結果からだけではわからないが、この群の母親による語りから、ID06やID23のように高学歴である母親以外でも、個人としての自分と母親としての自分との緊張や葛藤を抱えている母親は確か

に存在すると言えるだろう。

「母性愛」信奉傾向尺度の得点については、群の平均が全体の平均ともそれほど変わらない。得点が極端に高くも低くもないことから、やはり、語りでも見られたように、明確な「肯定」でも「否定」でもない考え方のあらわれであると言えるだろう。

グループE：「否定実行群」〈典型例〉ID28：「女性だから育児が、育児専念っていう考えではないんですね。やっぱり男性も女性も助け合うってやるっていうのがベースになってるんで。ただ現実、なかなかそうならない部分が多々あるんですね。どちらかっていうと、私の場合は育児に専念している方なんです。」

この典型例に見られるように、この群の母親は、一般的に女性が母親という役だけに専念する必要はないと考えている。しかしながら、「実際は（育児に）専念している」、「我慢している」というように、自分の信念とは異なる現実面での自分を語ったという点が特徴的である。そのような意味で、信念と実態とのギャップが大きい群であると言っていいたいだろう。ID03は、五年前、閉塞感から育児ノイローゼになったという。「主人は帰ってくるのが遅いので、夜にならなげや日本語の会話ができないって、それがすごく閉ざされている社会から離れてるって感じがして、すごくつらかったですね。今思えばね。」と当時のことを振り返って語っていた。自分はずし「母性愛」信奉傾向とは異なる認識をしていたが、夫とその実家の家族が自分に母親役割を強く求めたことから家庭に入ることにした結果、強いストレスが生じたという。ID28も現在は育児に専念しているが、「心の中では、いや、そうじゃないんじゃないのって思う部分があるから、どうしてもやってる部分があるし、心の中では否定する部分もあるから」悩むのだと語った。この群の母親においても、溝田・住田・横山（2003）にあるように、母親の母性観における意識と行動が一致していないゆえに不安が生じている可能性も考えられる。

それでは、「母性愛」信奉傾向の尺度得点から考える特徴はどうであろうか。この群の母親たちは、「母性愛」信奉傾向を否定した語りをしていることから、かなり低い得点が予想されるところだが、実際は全体の平均よりも若干低いという程度であった。すなわち、この群の母親は、「母性愛」信奉傾向を否定しているという信念よりも、「母性愛」信奉傾向に近い生活をしている現実の自分に近い得点結果であるとも言えるだろう。これはおそらく、先述したように、「本当は育児に専念したくない」、「自分だけが子育てをする必要はない」という思いを持ちながらも、「実際はせざるを得ないからしている」、「出来てしまっている」という自負から、得点がやや高いものとなったからではないだろうか。

グループF：「否定群」〈典型例〉ID21：「女性にとって母親になることだけが、こうなんか目的になるとか、子どもを産んで一人前になるとかっていうことには、すごく不自然さを感じる。こう、もっと女性は多様であってもいいって言うか。」

この典型例に見られるように、この群の母親は、一般的に、女性が母親という役だけに専念する必要はないと考えている。このグループの母親たちは、もちろん、言及の程度には言及量や強弱の質の違いは見られても、「母性愛」信奉傾向を迷いなく拒否する内容を語った。この群の母親は、他の群とは異なり、迷いや葛藤がなく「母性愛」信奉傾向を批判したり、不自然さを感じたりするような言及が見られた。とくに、この群には目的を持って大学院生活を送っているID21も含め、仕事をしている母親たちも他の群と比較して相対的に多いことから、家庭に留まることでは得られない、仕事をしていることの意義や意味などを述べる者も、5名中4名で見られた。これも、永久・柏木（2000, 2002, 2005）の研究と関連した結果と言えよう。つまり、高学歴のID21やID27、そして、パートという就業形態とは言え、専門的な職業である看護師であり、自分の仕事に意義を感じているID19、ファイナンシャルプランナーとして常勤で働いているID14が、「母性愛」信奉傾向を否定する語りを行ったことは、家庭役割以外にも個人としての関心を持ち、自分の生きがいを求めているということのあらわれであると言える。もっとも、ID21は、家庭役割だけではなく、自分の夢に従った生き方をしているからこそ、周囲の人間からの圧力に悩んだという。「母親だからこうしなきゃ、とか女だからこうしなきゃとっていうことには、立ち向かうことはできるんですけども、ただ、『子どもがかわいそうじゃない』とか子どもってのが主語になっちゃうと、すごい心が揺らぎますね。」と語っている。有北（2003）も、「まだ小さいのにあずけるなんて可哀想」という、一見、子どもの立場に立ったような周囲の言葉により、母親の不安が煽られており、このような周囲の理不尽な思い込みこそが、仕事を続けたい母親たちにとって無言の圧迫になると報告している。したがって、そのような周囲からの要求により、「母性愛」信奉傾向を拒否するという意識や生き方も変

化していく可能性は否定できない。

ところで、この群で唯一の専業主婦であるID07は、出産の一ヶ月前に退職したということであるが、現在のところ、復帰の予定は無いという。そのためか、とくに仕事についての意義が語られることはなかった。しかし、「ほんとと人それぞれ。人それぞれだからいいんじゃない、みたいな。その人は私じゃないんだから、違う意見があって当たり前だし、決めつける筋合いは無いし。」という言及が随所に見られた。この母親は、「母性愛」信奉傾向について、女性一般を母親役割に当てはめてしまうような印象を持ったらしく、一貫して否定した語りを行った。同じ否定群でも、このように現在の就業状態や今後の仕事の復帰などと関連して、異なる特徴を持つ場合があるということがわかった。

「母性愛」信奉傾向尺度得点に関しては、A群とは対照的にこの群の5名全員が協力者全体の尺度得点の平均値よりも低い得点となっている。これまで述べてきたような語りの特徴が「母性愛」信奉傾向の尺度得点の低さにもあらわれているのだろう。

考 察

本研究は、面接調査を行うことで、「母性愛」信奉傾向を質的に捉えることを目的とした。そのため、「母性愛」信奉傾向に関する語りを丁寧に記述していき、それぞれのタイプに属する母親の語りの特徴を、就業形態や学歴などの属性も絡めながら検討してきた。

本研究では、「母性愛」信奉傾向をこれまでのように数量的な観点からのみでは捉えておらず、「母性愛」信奉傾向尺度の項目を提示し、それについての語り方を調べるという方法を用いた。そして実際に、この回答からは「母性愛」信奉傾向の高中低という側面だけではなく、複数の要素が見いだされ、6つのグループに分類されることとなった。ここでの特徴として、A群（肯定群）やF群（否定群）のように、語りにまったく矛盾や葛藤が見られない群もあれば、B群（肯定不可能群）やE群（否定実行群）のように信念と実態が不一致である群、同じように「母性愛」信奉傾向を肯定しながらも、「女性一般」として捉えるA群（肯定群）や、「自分だけ」のものとして捉えるC群（自分肯定群）という違うタイプがあるということがわかった。これによって、これまで行ってきた質問紙調査だけでは測りえない部分が明らかになったと言えるだろう。実際、「母性愛」信奉傾向を受容しているという意味では同じA群（肯定群）とB群（肯定不可能群）でも、実生活で母親として生きることのハピネスなどを語る者が多いA群と比較し、B群においてはそのようなプラス面についてほとんど語られなかったことから、信念と実態が一致していないという状況下であることが想定される。これは、F群（否定群）とE群（否定実行群）との関係からも言えることであろう。

もちろん、それは単純にA群（肯定群）やF群（否定群）の母親がポジティブに子育てをしているという結論を導かない。F群の母親には、先述したように周囲からのプレッシャーや、それに伴う自責の念（Jackson & Mannix, 2004）もある。A群でこそ、「母性愛」信奉傾向に関する語りにおいてはネガティブなものはほとんど見出せなかったが、それは、本研究での協力者となったA群の母親の中には常勤職の母親がおらず、高学歴の母親も少なかったからだという可能性は否めない。もっとも、江上（2007）では常勤職で「母性愛」信奉傾向が高い母親も多く散見されたことから、今後の調査ではそのような母親を対象としていかなければならない。

それでは、C群（自分肯定群）はどうだろうか。C群は「母性愛」信奉傾向を「母親だから～しないといけない」という捉え方ではなく、「自分はそう思う」、「自分はそうしたい」という語り方をした群である。このことから想像されるように、「そうしないといけない」や「そうさせられている」という、過剰な気負いやプレッシャーを感じていない群とも言える。C群のような「母性愛」信奉傾向の受容の仕方は、他の群と比較するとその本人にとって自然なかたちであるがゆえに、比較的、ネガティブな語りが出なかったのだろう。

D群（部分否定群）は、「母性愛」信奉傾向という信念において、明確な否定でもなければ明確な肯定でもない群である。「母性愛」信奉傾向の項目は筆者が量的な研究によって導いた一次元概念であるがゆえに、その母親によっては、多分に矛盾を感じる場合があっても不思議ではない。そのため、設問①と②では、個人としての自分対母親としての自分から生じる緊張や葛藤（無藤・園田・野村・前川, 1996）、「このままでいいのか」という迷いなどの「揺れ」が多く語られた。この群が、その「揺れ」を「揺れ」のまま受け入れていくのか、自分

なりの意味づけを見つけるのか（例えば徳田，2004）、あるいは「肯定」・「否定」のどちらかに傾いていくのかということについて調べるためには、縦断的なデータが必要となってくるだろう。

本研究の結論として、三点述べておきたい。最初に、「母性愛」信奉傾向について、尺得点の高低という量的な違いだけではなく、質的にさまざま異なるパターンが存在するということがわかった点である。しかも単純な「肯定」や「否定」ではなく、現実との自分にギャップを感じていると語ったり、自分と一般論で分けて語ったりなど、想定された以上のタイプが得られたことは有意義であった。今後も、さまざまなタイプが存在するという事を考え、研究を進めていく必要があるだろう。

次に、本研究は「母性愛」信奉傾向についての語りを主な分析対象としたが、同時に「母性愛」信奉傾向尺度にも回答させたことから、得点と語りとの関係を検討できた点を挙げる。A群（肯定群）とF群（否定群）は想定通りの「母性愛」信奉傾向尺度の得点であったが、B群（肯定不可能群）やE群（否定実行群）などは、サンプル数が少ないながらも、興味深い尺度得点となった。A群（肯定群）とC群（自分肯定群）との得点の違いも、語り方の違いを如実にあらわしており、示唆に富んだものであった。

そしてもう一点の重要な結果として、「母性愛」信奉傾向のタイプについて記述する上で、母親の就業形態だけではなく、学歴が関係しているということも挙げたい。それもF群の母親たちに見られたとおり、単純に「大卒」、「高校卒」というものが背景としてあるのではなく、母親が家庭役割以外に何らかの別の自己実現への欲求を持っているか否か、ということこそが重要であると推察された。これは、就業形態でもいえることかもしれない。すなわち単純に「常勤職」、「パートタイム」という区別からのみ議論するべきではなく、どのような職種かということ、仕事と家庭との両立において葛藤を生みやすいのか否かということ（時間の融通が利くかどうか、体力は奪われるのか等）、そして何よりその職業にどの程度コミットメントしていききたいのか、ということこそが大きな要素なのではないだろうか。

最後に本研究の課題を述べる。まずは母親の就業形態における偏りが大きかった点が、解決すべき課題であろう。面接調査に応じてくれる母親としてはやはり、比較的、時間に追われない生活をしている専業主婦が多い。そのため28名中21名が専業主婦であった。F群に専業主婦ではない母親が相対的に多かったという点についても、面接調査を行う際には、常勤職やパートタイムなどの職業を持つ母親からもより多くの協力を得なければならぬ。さらに、母親の「母性愛」信奉傾向についても、その意味づけに至る経緯や母親の展望やライフイベントなども含め、それらと「母性愛」信奉傾向とを総合的かつ質的に明らかにする必要があるだろう。

文 献

- 有北いくこ(2003). 働く母親・働きたい母親の心のうち. 杉山千佳(編), *現代のエスプリー-仕事と家庭の両立-*, 429, (pp.140-149). 東京: 至文堂.
- Beck-Gernsheim, E.(1995). *子どもを持つという選択*. 木村育世(訳). 東京: 勁草書房. (Beck-Gernsheim, E. (1989). *Die Kinderfrage: Frauenzwischen Kinderwunsch und Unabhängigkeit*. München: C.H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung.)
- Birns,B.,& Hay,F.D.(1988). Conclusion. In Birns,B.,& Hay,F.D.(Ed.), *The Different Faces of Motherhood* (pp.281-286). New York: Plenum Press.
- 江上園子(2005). 幼児を持つ母親の「母性愛」信奉傾向と養育状況における感情制御不全. *発達心理学研究*, 16, 122-134.
- 江上園子(2007). “母性愛”信奉傾向が幼児への感情表出に及ぼす影響——職業要因との関連. *心理学研究*, 78, 148-156.
- Jackson, D., & Mannix, J.(2004). Giving voice to the burden of blame: A feminist study of mothers' experiences of mother blaming. *International Journal of Nursing Practice*, 10, 150-158.
- 柏木恵子・若松素子(1994). 「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み. *発達心理学研究*, 5, 72-83.
- 川村千恵子(2007). 家族支援とナラティブ・アプローチ. 畠中宗一(編), *現代のエスプリー-育児・子育てのなかの家族支援-*, 479, (pp.67-74). 至文堂.
- 溝田めぐみ・住田正樹・横山卓(2003). 母親観と育児不安. *日本保育学会第56回大会発表論文集*, 333.
- 無藤清子・園田雅代・野村法子・前川あさ美(1996). 複数役割を持つ成人期女性の葛藤と統合のプロセス. *日本教育心理学会第38回総会発表論文集*, 124.
- 永久ひさ子・柏木恵子(2000). 母親の個人化と子どもの価値—女性の高学歴化・有職化の視点から—. *家族心理学研究*, 14, 139-150.
- 永久ひさ子・柏木恵子(2002). 成人期女性における資源配分と生活感情—高学歴化は成人期女性の人格発達をどう変えるか—. *文京学院大*

学研究紀要, 7, 35-48.

永久ひさ子・柏木恵子(2005). 女性における自己配分—家族へか自分へか—. *文京学院大学研究紀要*, 7, 45-60.

Nicolson, P.(2001). *Postnatal depression: Facing the paradox of loss, happiness, and motherhood*. Hoboken, NJ: John Wiley and Sons.

Oberman, Y., & Josselson, R.(1996). Matrix of tensions: A model of mothering. *Psychology of Women Quarterly*, 20, 341-359.

大日向雅美(1988). *母性の研究:その形成と変容の過程:伝統的母性観への反証*. 東京:川島書店.

大日向雅美(2000). *母性愛神話の罫*. 東京:日本評論社.

塩崎尚美・無藤隆(2006). 幼児に対する母親の分離意識:構成要素と影響要因. *発達心理学研究*, 17, 39-49.

Swigart,J.(1995). *バッド・マザーの神話* (斎藤 学, 監訳 橘 由子・青島淳子, 訳). 東京:誠心書房 (Swigart,J.(1991). *The Myth of the Bad Mother: The Emotional Realities of Mothering*. New York: Doubleday.).

徳田治子(2004). ナラティブから捉える子育て期女性の意味づけ—生涯発達の視点から. *発達心理学研究*, 15, 13-26.

Terry, D. J.(1991). Stress, coping and adaptation to new parenthood. *Journal of Social and Personal Relationships*, 8, 527-547.

氏家達夫(1996). *親になるプロセス*. 東京:金子書房.

氏家達夫・高濱裕子(1994). 3人の母親—その適応過程についての追跡的研究. *発達心理学研究*, 5, 123-136.

註

本研究は、平成19年度の北海道教育大学「学長裁量経費・若手教員研究支援経費」による援助を受けた。なお、本論文は平成20年にお茶の水女子大学大学院に提出した博士論文の一部に修正を加えたものである。本論文の作成に当たり論文の作成にあたりご指導下さいました内田伸子先生、白梅学園大学の無藤隆先生、東京大学の遠藤利彦先生に心より感謝いたします。また、調査にご協力いただきました28名の女性に、心から御礼申し上げます。